

第268回山口西田読書会(=2021年4月10日開催分)のprotocols

担当:末永

第268回は4月10日(土)に開催され、まず、唐露氏のprotocolsを中心に会が進行した。西田が「S is P」という判断の構造を手引きとつ、「一般的なるもの〔≒述語 P〕」と「特殊なるもの〔≒主語 S〕」の関係のあり方に即して種々の対象界のあり方を考えようとする話の流れの中で、或る特殊なるものと別の特殊なるもの〔≒例えば学生と教員〕との関係の媒介となる一般者〔≒教育研究機関〕が消え、個物と個物〔≒学生と教員という肩書を取り払った個人と個人〕とが直接に関係し合う、そういう場が開かれるという箇所であった。西田は以前から、こうした場所を「矛盾的統一の対象界」を呼び、「数の世界」を具体例として挙げた。しかし、この段落では、「物の概念」と「力の概念」を出すことによって、もう一步踏み込んだことを言っている。これに関して、次の引用箇所を参加者全員で確認した。「特殊の背後に於ける一般は消え失せて〔単に映す鏡となり〕、〔そこに映されたものとしての〕特殊と特殊〔≒個物と個物〕とが直に相関係し、〔単に映す鏡と成った〕一般なるものは〔そこに映された個物が一切の質料性を失って純粋な働き、すなわち「基体なき作用」としての「現実活動態(energeia)」と成り、この意味での形相として、〕形相から形相に転ずる場所といふ如きものとなる」(同書、199頁)。その後、唐露氏の「哲学的問い」の内、とくに「宗教的覚悟」の合理的説明は可能か、可能であるとすればいかにして可能かをめぐって、参加者の間で討論が交わされた。

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、200頁7行目から203頁6行目まで
(=「働くもの(二)」の第9段落と「働くもの(三)」の第1段落)

【テキスト要約】

西田の考えでは、特殊なるものと特殊なるものとの関係の媒介となる一般者が消え、個物と個物とが直接に関係し合う、そうした場所が開かれるのは、「物が自己自身を知ること」(同書、200頁)としての「働くこと」が成立する時である。言い換えるなら、「働くことの極致」としての「知ること」(同書、200頁)が成立する場面においてである。前々回の講読箇所、「真に超越的な物が内在的となるには、単に経験内容が時に於て統一せられるのみならず、経験内容其者が時を含まなければならぬ」(同書、199-200頁)と言われたように、超越的なものを内在化し、非合理的なるものを合理化し、主語的なものを述語づける、そういう仕方、いわばある種の力技によって我々の経験を可能にする純粋統覚が、それ自体、「経験自身の直観〔≒経験が経験自身を知ること〕」(同書、200頁)と成る、そういう段階に到って初めて、「物が自己自身を知ること」としての「働くこと」、「働くことの極致」としての「知ること」が成立する。西田はそう考える。

次の段落では、「働くもの(二)」の冒頭で述べられたように、西田が「働くもの又は働き」(同書、189頁)を「判断の主語と述語との関係」から、もっと言えば、「概念的知識の本質たる一般と特殊との関係」(同書、189-190頁)から考えようとしていることの再確認がなされ、西田独特の「直観〔≒思惟を含んだ直観〕」をめぐる考え方へと話題が移っていく。

西田によれば、何かを概念的に知るとは、一般〔≒述語 P〕と特殊〔≒主語 S〕との関係がそこで問題となる種々の判断形式へと、話題になる事柄を落とし込むことである。ところで、どのような判断形式もすべて「S is P」という包摂判断の形へと帰着させることができる。例えば、「この花は赤い」という判断〔≒内属判断: 述語の示す徴表が主語に属する、または属さないことを表わす〕であれば、「この花は赤いものである」

という判断〔≒包摂判断：主語の外延が述語の外延に含まれる、または含まれないことを表わす〕へと書き直すことができる。西田は、伝統的形式論理学において「S is P」が「包摂判断」と呼ばれるのをふまえており、「一般的なるもの〔≒述語 P〕が基となって特殊なるもの〔≒主語 S〕を包む、特殊なるもの〔≒主語 S〕が一般的なるもの〔≒述語 P〕に於てある」（同書、273 頁）と後で言われるように、いずれこの判断形式が、「S〔≒主語・特殊なるもの〕は P〔≒述語・一般的なるもの〕に於いてある」と定式化されることになる。このように、「知ること」を蝶番として、西田の判断論と場所論とが接続することになる。

ところで、西田によれば、一般〔≒述語 P〕と特殊〔≒主語 S〕との関係が成立するには、その背後に「自己同一なるもの」がなければならない。「自己同一なるもの」とは、「一般の中に特殊を含むもの〔≒個物？〕」すなわち「具体的一般者」である。具体的一般者は、ここでは「真の一般概念」とも言われ、さらにこれが「自己の中に自己を映す鏡の如きもの」（同書、201 頁）でなければならないとも言われる。最終的に、特殊〔≒主語 S〕と一般〔≒述語 P〕の根柢に横たわる自己同一なるものは、「自ら照らす鏡といふ如きもの」（同書、201 頁）と規定される。西田がここで、概念的知識や我々の経験そのものを成立させる要件として「自ら照らす鏡」、「自ら映す鏡」という表現を出すのは、純粹統覚の総合的統一〔≒認識主観の自発的な思惟作用〕によって成立する知識や経験といえども、認識主体からの一方的で能動的な働きかけだけでなく、最後にはそうした働きの届かない「映す」（ないし「見る」）ということが残る、そう考えているからであろう。

さらにこの「鏡」を、西田は、現に在るこの世界を創造する以前に無限の可能的世界を考えたというライプニッツの神の叡智に例えている。以前に触れた神の「予定調和」という思想にも関わることであるが、そもそも神が、自らの観念の内にある無限の可能的宇宙の中からただ一つを選び、これを「最善なる世界」として現実存在させた「根柢」とは何か。ライプニッツによれば、それぞれの可能的世界は、それぞれに内包する「完全性」の度合いに応じて現実存在を要求する権利をもつ。ライプニッツの考える「完全性の法則」とは、最も単一なる手段の中に最も豊富な結果が得られるようなあり方を指す。言い換えると、可能な限り多くの実在性を含むような、神の完全性にも比すべき完全性を含む一つの可能的世界が、「最善なる世界」として、神によって選択されたのである。ここで西田の言う「神の叡智」とは、無限の可能的世界を観念する＋その中からただ一つを選択するという、二段構えの神の行いであろう。これを受けて、無限の可能的世界を映している一般者に於いて一般者が自ら「此世界」を限定するはたらき〔≒一般者の自己限定〕と、我々の経験的世界を構成する純粹統覚〔≒認識主観の自発的な思惟作用〕との緊張関係〔≒具体的一般者と純粹統覚をある程度まで類比関係で考えることができるものの単純に同一視できないという意味での関係性〕が、〈思惟を含んだ直観〉（あるいは〈直観を含んだ思惟〉）という形で描き出されることになる。

西田によると、「この机が檜から作られている」（「リンが 40 度で燃える」という事実を、我々は一方で偶然と考えるが、他方で必然であるとも考える。つまり、この経験的事実について、神の摂理なり天の配剤なりを感じるセンスというものを、我々は持っている。西田はこれを「直観〔≒思惟を含んだ直観〕」と呼び、さらにこれを、カントであれば認めなかったような、直観する悟性、「叡知的悟性といふ如きもの」と評する。なお、西田がこの文脈で言おうとする「真の直観〔≒自ら映す鏡〕」とは、いわゆる主客合一の境地ではなく、「自己の中に自己を見る」（同書、202 頁）ことである。ここからさらに、我々の経験的世界を構成する純粹統覚と、自己限定する一般者との（ある程度までの）重ね合わせがなされていく。つまり、西田の考えでは、純粹統覚も一種の〈思惟を含んだ直観〉でなくてはならず、この直観は、「無限に自己を限定して行くといふ意味においては構成作用であり、無限に自己の内に省みるといふ意味に於ては判断〔作用〕である」（同書、202 頁）という。たしかに、「直観が無限に可能なるものを蔵する」限り、論証的（diskursiv）思惟によっては「達すべからざる奥底」がどこまでも残る。しかし、無限の可能的世界を映し出すものとしての「映す鏡」であり、その意味での「一般概念」（同書、202 頁）であり、「総ての實在の根柢に横たはる基体」（同書、202 頁）とも考えられるような「直観の一面」が純粹統覚の根柢に想定されうる限り、統覚自身、ある種の〈自己限定する一般者〉であり、そのはたらきが「無限の可能を包むものの自己限定」であると、西田は言うのである。

なお、段落の最後に、西田は「純粹視覚といふ如きもの」（同書、203 頁）に言及している。これは、純粹統覚と具体的一般者とが互いを照らし出すような仕方で、つまり、カントの純粹統覚において見えにくくなっている「映す鏡」としての「直観の一面」を西田の具体的一般者が炙り出したように、具体的一般者において見えにくくなっている「構成作用とも云ふべきもの」を純粹統覚が炙り出す時、具体的一般者において何が見えてくるかについての、例示的説明である。「働くもの（二）」の冒頭で述べられた「構成的範疇を包むと云った反省的範疇から、構成的範疇への連絡をも求め得るかと思ふ」（同書、190 頁；同書、194 頁）という、西田の思索上の企図は、ひとまずここで達成されたと考えていいだろう。

【参考文献】

池田善昭 『『モナドロジー』を読む——ライプニッツの個と宇宙』、世界思想社、1994 年。

*4 月 25 日に加筆修正（末永記）